

# 「千葉氏を

## 語る」だより

### 第三回講演会開催

本会恒例の平成二十九年度のシンポジウム・講演会は去る十二月九日午後一時より千葉市中央区の市民会館で行われました。

まず最初に向後保雄会長から挨拶があり、その概要は次のとおりであります。

本日はお忙しい中お集まり戴きまして有り難う御座いました。これから両総平氏と千葉六党という題目で、ご出席の諸先生方の専門的なお話を披露して戴けることとなっております。千葉市では現在四つのアイデンティティの一つがこの千葉氏に関する千葉の歴史の普及にあるのであります。実は私も千葉氏に関する歴史の必要性について大変関心がありますので市内の百十校の小学校に紙芝居を贈呈したいと市の教育委員会に働きかけているところであります。之も小学生が千葉市の歴史に興味を持って戴くためのものであります。

平成29年度  
第5号  
発行・編集  
千葉氏を語る会  
発行日  
平成30年1月31日

又千葉開府九百年に向けての動きの一つであります。どうか会場の皆様も今日はじっくりと千葉氏について勉強して戴ければ幸いです。これで挨拶とさせて戴きます。

続いて国立歴史民俗博物館 田中大喜先生の基調講演がありました。

#### 「上総氏と藤姓足利氏」

#### ― 関東在地系豪族的武士団 ―

只今ご紹介を戴きました佐倉の国立歴史民俗博物館に勤務しています田中と申します。今日は「両総平氏」という演題を戴いたのですが、そのリーダーとなった上総氏の話をしたいと思います。上総氏については先行研究が多く発表されていますので、皆様よくご存じだと思いますが、この上総氏と同時期に北関東で大勢力を持った藤姓足利氏との比較を通してして明らかにしていきたいと思えます。

一、上総氏とはどのような武士団か

野口実先生は「一族を上総一國のみならず、下総の一部にまで分立させて両総平氏の棟梁的地位にあり、当時、坂東諸國に割拠した小山・三浦・千葉氏など、一般には上総氏同様に豪族的領主という概念のもとに包括される有力武士団とは、一線を画する圧倒的勢力を保持する存在であった」と指摘され上総氏の存在形態は「鎌倉政権草創の時期における他の武士団に比べて特異なもの」と纏められました。しかし近年更に研究が進み、上総氏も小山・三浦・千葉氏などと同じ「在地系武士団」の一類型と認識されています。とはいふものの、関東の豪族的武士団の中で上総氏の勢力範囲は軍事的テリトリーは突出しています。また国名を名字としたことは上総氏の特性であり、その存在形態を追究する作業は今後も必要です。

ところで関東には、上総氏と並ぶ豪族的武士団として、上野國の藤姓足利氏がいました。治承四年(一一八〇)の源頼朝挙兵時、京都の公家藤原兼実の日記(彼の許には関東の情報が頻繁に入る)『玉葉』の九月十一日の条には「頼朝等、箱根山に逐い籠めおわんぬ、これにより追

落とさるるの由、風聞か。しかるに、その後上総國住人八郎広常ならびに足利太郎等与力す」記されています。ここで、数多くの豪族的武士団の居る中で上総氏と足利氏だけが記されているのは、両者が同等の勢力として認識されていたこと示します。この両者を比較して、上総氏の存在形態について再検討してみましよう。

#### 士団の形成

○上総氏の所領は武士団の形成 上総氏はどのように武士団を作り上げたのでしょうか、それは房総の地が中世的社會に轉換していくこと、すなわち莊園・公領制の成立と併行して展開しました。

房総の地にも多くの莊園・公領が出来ました。その第一のきっかけは、長元元年(一一〇二)の平忠常の乱です。房総に大きな勢力を持っていた忠常は朝廷に反攻し、朝廷もその追討のため三年間も混乱が続きました。このため房総は亡弊・亡国化したと言われます。しかしこの亡弊・亡国とは土地が焼土化して耕作が出来なく、人も住めなくなることを意味しません。この地から税が拵がらなくなつたことを意味するのです。

第二のきつかけとして天仁元年（一一〇八）の浅間山の大噴火がありま  
す。下総国にも降灰が積もり（発掘  
調査の結果もある）耕作に大きな影  
響を与えたと考えられます。そして  
第三のきつかけとして十世紀末以降  
の気候の温暖化と臨海部の高燥化  
（乾燥）によって土地に対する環境  
の変化が起きたことが挙げられます。  
これらの戦乱、自然災害からの復  
興・再開発の過程で荘園、公領制が  
できます。

史料二―一では（これは京都の貴  
族が記した「小右記」という日記で  
ある）長元四年（一一〇三）三月一  
日の条に「下総国忠常追討のことに  
より亡弊殊に甚し」とあり、逃散し  
た民を集め耕作に勤めさせるために、  
下総守藤原為頼が重任を願ひ出たこ  
とが書かれています。また史料二―  
二では別の京都の貴族が「左経記」  
という日記の、長元七年（一一〇四）  
十月二十四日の条に、藤原辰重が上  
総の国司になった時は五〇余町しか  
なかった耕地が年々増えて今年の内  
検では一二〇〇余町に増加し、逃散  
した民は多く戻ってきて耕作に従事  
していると記されています。大分誇

張があるかも知れませんが、復興が  
大幅に進んだことが解ります。

この二人の国司は逃散していた  
人々を帰参させて耕作に就かせてい  
ます。「開発」というのは耕作者の  
居なくなった耕地に浪人を招き寄せ  
て生産活動をさせることです。史料  
二―一・二にはこの「開発」のこ  
とが書かれていますのであり、指導者は  
国司となっています。現地における  
実際の開発主体は在地の新たな有力  
者、即ち村郷領主とみられます。

史料三の「醍醐雑事記裏文書」（年  
月日不詳）印東荘郷司・村司等交名  
という文書には十数名の名前が記さ  
れています。彼らは郷・村の有力者  
であり、この亡国の開発を行った  
人々と見られます。

その一人に「中臣忠兼」と言う人  
物が見えますが、彼は史料四「醍醐  
雑事記裏文書」（年月日不詳）前権  
介平常澄解と言う古文書の中に登場  
します。この史料四によれば、元々  
印東荘は馬を飼育して京都の本家に  
馬を納める荘園であったが、あると  
き馬が届かないので、本家（醍醐寺）  
は地元の沙汰人・公文等の過失を咎  
めたところ、常澄は沙汰人が悪いの  
では無く預所の菅原定隆が自分の所

に止めていたのであり、沙汰人等は  
悪くないと申し立てたことが解りま  
す。常澄は忠兼ら沙汰人、村郷領主  
を守る立場にあつたのであり、上総  
氏はこれら村郷領主を組織して開発  
を進め、それを自身の所領として荘  
園化・公領化を図つたとも考えられ  
ます。忠兼をはじめとする村郷領主  
は上総氏の末端軍事力を構成し、そ  
れらが集まって上総氏の武士団を形  
成したのです。

○藤姓足利氏の所領Ⅱ武士団形成  
藤姓足利氏は本来上野国を基盤と  
した武士団で、上野国衙の最有力在  
庁豪族です。俊綱とその子忠綱は「上  
野大介」という地位を平清盛に直訴  
しています。系図上で分出する一族  
は当初上野国東部の地名を名乗る者  
（大胡、山上、那波、藪田等）が中  
心であり、後年になって下野国西南  
部の地名を名字として名乗る者（佐  
野、阿曾沼、辺屋子等）が登場しま  
す。このように最初は上野国で基盤  
を固め、その後には下野国に進出した  
ようすです。これは上総氏も同じで、  
下総国で基盤を固め上総国へ進出し  
たのです。

上野国においても中世の社会体制  
即ち荘園・公領制の成立が契機とな

つたのは天仁元年（一一〇八）の浅  
間山の噴火であり、膝下の上野国は  
その火山灰等の被害により亡国化し  
ました。史料五「中右記」天仁元年  
（一一〇八）九月五日の条には「今  
年七月二十一日より猛火山嶺を焼く。  
これによりすでに以て滅亡。と書か  
れています。そこで藤姓足利氏は国  
衙在庁の地位を利用して再開発権を  
獲得し所領の再開発を推進しました。  
上野国では復興政策に巨大な水路  
を十二キロに渡って作りました。こ  
れを「女堀開削」と呼んでいます。  
藤姓足利氏はこのようなプロジェクト  
を進めて上野中央部、東部から下  
野西南部一体を再開発し、荘園化・  
公領化を図り、自分の所領を形成し  
て武士団の勢力拡大に励んだのです。  
上総氏と同様、藤姓足利氏も再開発  
の實質的主体となって、武士団を形  
成したのです。

三上総氏と藤姓足利氏の地域的結合  
○上総氏の地域的結合

上総氏と婚姻関係を持った武士団  
には、相模の三浦氏がいます。広常  
の弟金田頼次が三浦義明の娘を妻に  
迎えました。これは東海道（東京湾）  
を介した交流が前提にあつたと見ら  
れます。また、広常の甥伊北常仲が

長狭常伴の外甥であり、安房の長狭氏とも婚姻関係を持っていました。長狭氏は安房国最有力の武士団で、三浦氏と敵対関係にありました。広常・頼次の三浦氏との提携は、常仲と長狭氏との提携への対抗という側面が認められます。そして尾張国の原高春は広常の外甥でした。上総氏は地元上総と京都の往来の中で尾張の原氏と交流していたと見られます。このように上総氏は、房総半島近隣の武士や、京都との往来の中継地となる尾張の武士と婚姻関係を結んでいたのです。

○藤姓足利氏の地域的結合  
藤姓足利氏が血縁関係を持った周辺武士団には、下野国の小野寺氏がいます。足利家綱の娘が小野寺義寛に嫁いでいます。また、常陸国の中郡頼経の子経高は、藤姓足利氏（おそらく家綱）から養子に入った人物でした。両氏とも東山道を介した交流が前提にあったものと見られます。

四、上総氏と藤姓足利氏の明暗  
—京武者系豪族的武士団との軋轢—  
○京武者系豪族的武士団とは何か  
十二世紀に在来の豪族的武士団を傘下に置き、京都を拠点とする武士  
||京武者が組織した武士団のことを

京武者系豪族的武士団といえます。彼らは自らが在庁官人に列するのではなく、現任・旧任の知行国ないし受領(国守)と直結しましたそして、院や摂関家などの有力貴族と関係を持ち、衛府尉や国守の官職を得て身分としては四位・五位の諸大夫(中級貴族)に列した武士です。代表例としては河内源氏がいますが、そのほかに平泉藤原氏・越後城氏・下野宇都宮氏等もこれに準ずる存在であります。

○上総氏と下総藤原氏  
保延二年(一一三六)の藤原親通の下総守補任を機に、子息親方・親盛と孫の親政は、藤原頼長・平清盛との提携を背景に、下総国千田庄・匝瑳北条・東庄(橘庄)を支配下に置き実質的に国守に匹敵する実力を形成し、下総の武士団を組織して下総藤原氏を成立させました。また両総平氏の中にも片岡、原、金原、栗飯原氏や、上総氏の中からは、木内、匝瑳、印東氏らが傘下に組織され、広常から自立を試みる者が現れました。ほかに長狭氏と結んで対抗する伊北氏もいました。

下総藤原氏の存在は、広常の両総平氏族長の地位を不安定にする要因

となりました。これが相馬御厨の領有を巡って下総藤原氏と対立する千葉常胤と連携する背景になったのです。

治承四年(一一八〇)九月広常は常胤と共に頼朝の挙兵に呼応し、下総藤原氏の討滅に成功しました。さらに史料八一「吾妻鏡」治承四年九月十九日の条によれば、広常は両総地域の平家方勢力を掃討し、二万騎を率いて頼朝の許に参上したと記されています。また史料八一「延慶本平家物語」第二末十九「上総介弘経殿の許へ参事」には「当国内、伊北、伊南、庁南、庁北、准西、准東、畔萩、堀口、武射、山辺の者共、平家の方人にして強る輩をば、押寄々々是を討つ」と記されています。こうして、広常は反対勢力の討滅を進めて両総平氏族長の地位を回復・確立し、上総氏を関東最大の武士団に押し上げたのです。

○藤姓足利氏と河内源氏  
河内源氏は、元々在京武士でした。しかし、源頼信の上野介在任中に上野国内に、又義家の下野国守在任中に下野国内に摂関家の荘園を成立させ、これらを北関東の拠点として確保しました。一方、藤姓足利氏(家

綱)は源義国(義家の子)の家人となつて、上野、下野の義国の荘園(八幡荘・新田荘・足利荘)を管理しつつ上野国の再開発を進めました。

ところが、河内源氏(義国・義重父子)も上野国の再開発に関与したため、やがて藤姓足利氏と競合するようになり、下野国でも築田御厨の藤姓足利氏の権益を奪っており、対立を深めていきました。河内源氏と藤姓足利氏は対立しましたが、中央政界の有力者と結びつきを持つ、前者が優位に立ち、後者を抑圧していくことになりました。従って藤姓足利氏の中には河内源氏に従う者も現れたと見られ、リーダーの忠綱は一族の統制に苦しむようになります。

史料九「延慶本平家物語」第二中廿二「南都大衆摂政殿ノ御使追帰事」には「以仁王の乱に際し、宇治川の戦いにおいて、手柄が認められて忠綱は要望どおり上野大介のご褒美を承った。しかし、足利一門の者共十六人が連判を持って申し立てたため忠綱への褒美は取り消されたと記されています。このように藤姓足利氏の中でも一門の中には不満が出てきていました。これは先の上総氏の場合と同じ現象であります。

治承・寿永の内乱当初、藤姓足利氏は平家方でしたが、頼朝の挙兵に応じて帰順して、義重との対決に挑みました。一方義重は、頼朝の挙兵参加の要請に応じず自らの寺尾城に立て籠もり軍兵を集めました。史料十「吾妻鏡」治承四年九月三十日の条には「足利太郎俊綱は上野国の府中の民家を焼き払った。これは源家（義重）に属する者が任んでいたためである」と記されていますが、これも広常と同じく藤姓足利氏は軍事的対決によって現状の打開を図ったものと考えられます。

史料十一「吾妻鏡」治承四年十月十三日の条には「木曾冠者義仲が亡父義賢にならない、信濃国を出て上野国へ入ると地元住民は従うようになつてきたので、俊綱からの妨げがあつても恐れることは無いと命じた」と記されています。このように木曾義仲が上野に進出したために、藤姓足利氏の軍事行動は失敗します。さらに義重も頼朝に帰順してしまいました。この結果、忠綱は藤姓足利氏を纏める事が出来ず、藤姓足利一族は分立してしまいます。結局忠綱は平家方に戻り、頼朝に挑むも失敗に終わります。京武者系豪族武士団

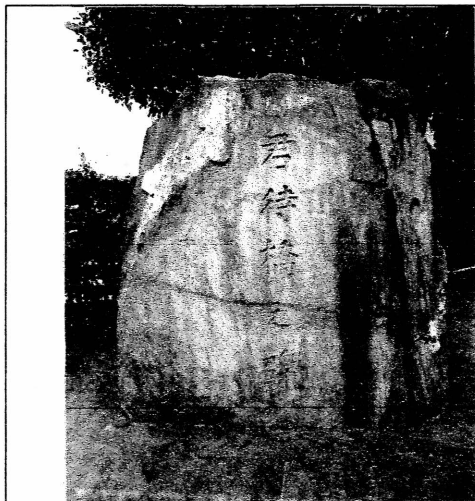
との軋轢の精算の成否が上総氏と藤姓足利氏の明暗を分けた事になったと言えるでしょう。これで私の講演を終わりと致します。ご静聴有り難うございました。

### 千葉市の名所案内

#### 伝説 君待橋

(千葉市中央区港町)

千葉常胤の一族が千葉へ入る源頼朝の一行をこの君待橋下で出迎えたと伝えられています。



**本会のホームページ本格稼働**  
我が千葉氏を語る会のホームページが昨年十二月より稼働しました。本会発足以来の事業内容とか、千葉氏を取り巻く行政、社会の動向とか



内容を含めバライティに富んだ盛況山の項目を楽しめます。是非御覧下さい。ホームページアドレスは次のとおりです。

## 千葉氏を語る会

ホームページ・アドレス

<http://chibaujikataru.sakura.ne.jp/index.html>

# 蘇我コミュニティでの講演

平成二十九年十一月十二日

## 「千葉氏入門講演会」要旨

副会長 丸井敬司

今回の講演の趣旨が千葉氏の入門と言う事であったので千葉氏の特徴として系譜、家紋や妙見信仰について述べた。

この内容は、まず、最初に千葉氏の系譜について述べていきたい。

千葉氏は桓武天皇のひ孫にあたる高望の子である良文を始祖とした武士団で、その成立は大治元年(一一二六)上総の大権氏が大権から下総の千葉に移住したことで成立した。

この武士団の系譜を考える時、始祖とされた良文は、重要である。

良文は当初、村岡余五郎(『徳島本千葉系図』)もしくは五郎(『源平闘諍録』)と呼ばれた。

この良文を始祖として仰いだ千葉氏の成立は古代末期の十二世紀の初頭である

『徳島本千葉系図』について少し説明すると。この系図は十三世紀中ごろ千葉で作られ、蒙古襲来の際、北九州の小城に渡り、九州千葉氏に伝来したものである。後、江戸時代初期に鍋島氏に渡り、以後不明となった。しかし、

鍋島氏に渡る直前に鍋島氏一門の諫早氏によって写されたものが最近発見された。

さて、千葉氏は常重の代に結成されたが、この常重に関しては『徳島本千葉系図』・『源平闘諍録』の両資料では「大権介」とされている。一方、『千葉集抜抄』の常兼の項には「大権権介」とされている。常兼・常重は上総国の在庁(上総国に努める役人)であった。

しかし、常重の千葉移住後、常重やその子常胤が上総の在庁であった記録は皆無である。つまり、常重は大治元年(一一二六)に千葉に移住したが、その段階で大権の土地と上総での権益を失っていることはほぼ確かである。また、常重が千葉に移住した六月一日は、下総の相馬の土地を叔父常晴の養子になって継承していることから考えると常重の千葉移住は叔父常晴との間で相馬領と大権を交換した結果であったと考えてよいと思われる。

続いて千葉氏の特徴の一つである通名「胤」は常胤以後の一族に与えられたもので、元服の際に付けられたものである。

千葉氏の元服は代々、千葉の妙見宮(北斗山金剛授寺尊光院。現在の千葉

神社。(以下「尊光院」+という)で行われた(千葉寺ではない)。『千葉集抜抄』によれば、この時、三本の籤を引いて決定したとある。この付け方については原則として「胤」とするのは千葉氏惣領の場合で、庶子は「胤」としたと考えられる。

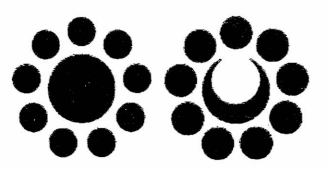
続いて千葉氏の家紋の問題について考えてみたい。現在、千葉氏の家紋は「月星紋」と九曜紋」とされるが、江戸時代に書かれた「千葉伝記」によれば「本宗家は月星紋を使い、庶子家は多様紋を使用していた」とされる。



千葉氏の家紋について最も古い資料は十四世紀の初頭に制作された『源平闘諍録』で、これには千葉氏の家紋は「千九曜紋」とされているが、当時は「月星紋」と呼ばれていたものであった。

この資料では「千九曜紋」の形が描かれていないが、黒丸で表した星と三日月から構成され、星の数は九星以上のものであったと考えられる。この紋形に最も近いものは天文十九年に建設された尊光院妙見宮の妙見菩薩左

右にあった紋である。この紋形から考える

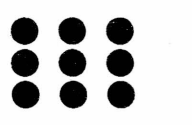


以前の家紋は、半月の九曜紋」と「満月の九曜紋」であり、前者を「月星紋」、後者を「多

なお、鎌倉時代に分かれた東北千葉氏の一家である陸前高田市の矢作千葉氏は「半月七曜紋」を今でも使っている。『千葉伝記』によれば、これも月星紋の一つである。

一方、多曜紋を使用していた事例としては海上氏の妙見像があげられる。この妙見像の胸には「満月九曜紋」が付さうよが開基となった増上寺では四角い九曜紋が使われている。これも九曜紋の一種と考えられる。

なお、当日は妙見信仰にも少し触れたが、ここでは割愛する。



六 角 九 曜 紋

# 九州千葉氏の史跡を訪ねる研修会

平成30年1月

## 佐賀県小城市一泊二日の旅 募集

主催：千葉氏を語る会

日程：平成30年7月21日(土)～22日(日)

費用：13,000円/人 内 (1泊2食宿泊代、史蹟廻りバス、入館料、  
訳 (資料代等、参加人員により若干の増減あり)

募集人員：27名

宿泊先：開泉閣 (小城市内)

集合：小城駅 7月21日(土) PM1:00

解散：小城駅 7月22日(日) PM1:00

注 (小城までの交通手段は各自手配をお願いします)

史跡等の見学、  
訪問予定先  
(小城市内)

小城市歴史資料館  
須賀神社 (元 祇園社)  
千葉城、千葉公園  
北浦社 (元 妙見社)  
光勝寺 (日蓮宗寺院)  
円通寺 (宗胤が再興した寺院)  
三岳寺 (創建当時の仏像等あり)  
祇園祭 (山挽き)

尚、小城市までの切符(JR、航空券)手配に付希望者は下記の旅行社紹介します

( JTBコーポレートサービス社 営業第二課 高橋七海 )  
(TEL) 043-201-6315

参加申し込み；2/20までに担当窓口へ下記申込書に記入の上、費用の13,000円を添えて申し込みください。不明な点は同様担当窓口まで問い合わせ下さい。

担当窓口；千葉氏を語る会 担当 江波戸弘安(携)080-2067-6657(tel/fax)043-232-4492  
事務局 日向安昭(携)090-8305-6601(tel/fax)043-253-1273

----- き ----- り ----- と ----- り ----- 線 -----

研修会 申込書	氏名	生年月日
	住所	TEL/携帯

# 享徳の乱と千葉氏本宗の分裂

会員 島田晴三

はじめに

日本の戦国動乱の時代は、何時始まるか、多くの歴史研究者は、一五世紀後半の「応仁・文明の乱」(一四六七〜一四七七)に始まるといわれてきたがしかし、この応仁の乱の前に関東では享徳の乱(享徳三年、一四五四)が行われていたのである。

この乱の命名者は峰岸純夫先生である。(佐藤博信氏は享徳の大乱という)享徳の乱は、鎌倉公方足利成氏が関東管領上杉憲忠を鎌倉西御門邸に招いて誅殺するということを発端として、公方と管領(上杉氏)の全面対決、それに幕府が上杉氏支援を決定、周辺守護の出陣を命じ、関東全域を巻き込んだ内乱に発展する。

## 一、古河公方の成立と関東の騒乱

(一) 古河公方の成立

鎌倉公方(足利持氏)滅亡の後、関東の諸将は足利義政に持氏の子万寿王の関東下向を要請。万寿王は宝徳元年(一四四九)鎌倉で元服して成氏と称した。「足利尊氏の室町幕府」前政権の北条氏は鎌倉に幕府を置き関東武士団を直接統治していたが、将軍が京都に在すると、関東で

は所領の安堵、代替わりの認証等のためいちいち京都まで行かなければならない。この役割を為すのが鎌倉府である。鎌倉府の長官には尊氏の子が就任した。その鎌倉公方には足利氏。その補佐人(後に管領)には上杉氏が就任した。上杉氏は足利氏の目付役となり、行き過ぎた事を正す任務を帯びる。そしてだんだん上杉氏が力を持つ。

## (二) 永享の乱、

正長二年(一四二九)三月、足利六代将軍に義教(青蓮院義円が還俗)が就任する。これに反発した鎌倉公方持氏は出兵し争うが、破れ永享一年(一四三九)二月十日鎌倉永安寺で自害する。持氏の子安王、春王、万寿王の三人の遺児は鎌倉を逃れ、その遺臣達と常陸国で挙兵し、下総国結城氏朝を頼って結城城に入り、幕府側と戦う。しかし、嘉吉元年(一四四一)四月一六日落城する。持氏の遺児三人は生け捕りにされる。春王丸(一二才)と安王丸(十才・十一才とも)は京都に護送される途中五月十六日美濃国垂井の金蓮寺で誅殺される。残る幼い万寿王(四才とも)は、誅殺するかどうか幕府に注進していた折、六月二十四日将軍足

利義教が播磨国守護赤松満祐に殺害(嘉吉の乱)され、万寿王は生き延びたのである。

## (三) 千葉氏の分裂

ア、千葉介胤直は、当初成氏に属したが後、上杉方に味方した。その頃、千葉氏の家臣や一族も次第に自立し、成氏方と上杉方に分かれて争うようになった。上杉側には胤直、園城寺氏が味方し、古河公方側には原氏が付く。

## イ、康正元年(一四五五)成氏方

であった宿老原胤房は胤直の抛る千葉城を急襲した。これに破れた胤直軍は多古の志摩城(嶋)や多胡城に立て籠もった。両城は、胤直の叔父馬加康胤や原胤房らの連合軍によって攻撃され落城した。胤直、子の胤宣、弟の胤賢や園城寺公任などの家臣が共々自害して果てた為、千葉氏本宗家はここで滅亡した。

ウ、千葉介胤直一族を滅ぼした馬加康胤は、千葉氏本宗家を継承したが、上杉氏は胤賢の子実胤と自胤を市川城に抛らせたため、千葉氏は本宗家を継承した馬加康胤系統の「馬加千葉氏」と胤賢系統の「武蔵千葉氏」の二流に分裂した。

## 二、戦国の争乱

(一) 東常縁の下総下向と下総千葉氏の佐倉城への移城

康正元年(一四五五)十一月、幕府より派遣された東常縁は馬加康胤の抛る馬加城を攻撃してこれを落城させた。更に康胤を追い詰め翌年康正二年(一四五六)上総国八幡之を討ち取った。

常縁は文明元年(一四六九)美濃国へ戻り、下総国では康胤が敗死した後、祖父胤の庶子馬場重胤の子孫である輔胤が家督を継いでいる。この輔胤は千葉介と称した。幼名を万君丸。馬加康胤の次男。下総国印東庄岩橋城(現在の印旛郡酒々井町)の城主で岩橋殿と言われた。そしてその子孝胤(のりたね)へと継承されていくのである。

(二) 本佐倉城の築城と馬加系千葉氏の成立

千葉介輔胤又はその息子孝胤は拠点平山(千葉市緑区)、長崎(長峰力、千葉市若葉区)を経て文明十六年(一四八四)本佐倉城を築城した。そして千葉介孝胤から勝胤、昌胤、利胤、親胤邦胤と嗣がれ、最後の重胤は天正十八年、(一五九〇)秀吉の小田原攻めにより後北条氏の滅亡と運命をともにした。な、小

田原城に立て籠もった千葉氏の所領は全て没収され、当主の重胤は江戸に出て浪人となり、寛永十年、病死した。子供はなかった。

## 木更津市内の古道鎌倉街道

会員 高野利太郎

鎌倉街道とは、源頼朝が開いた鎌倉幕府に一旦緊急の事態が発生した場合関東各地の御家人が鎌倉へ馳せ参じる為に、その居城と鎌倉を結ぶために作られた古道である。特に下総、上総国は治承四年(一一八〇)八月に源頼朝が相模国石橋山の戦に破れ安房国へ逃れてきて千葉常胤等の協力により鎌倉に進みここに幕府を開いた時に進んだ古道とは異なるものである。頼朝の没後、執権北条氏よって幕府が運営されるようになってから計画実施されたものである。そこで今も残る鎌倉街道は、木更津市南部の中烏田字堂谷十字路にある地藏堂の石塔には上部に仏像が彫られその下に「右からす田道、北かまくら道、左高くら道」と書かれた道標から判明する。この地から北方の木更津中心部へ向かい真舟、桜井の境界の尾根筋に古道が残っている。これが中世以来の鎌倉街道と言

われる道の一部である。右手に住宅団地を見下ろし、二つの高校のフェンス脇を通る道で、尾根を降りた辺りから宅地造成で道が定かでは無いが、道は北西へと進み、貝淵へとつながる。ここから先貝淵には「渡海面」という小字がある。この渡海面とはどのような意味であろうか、称名寺で暦応二年(一三三九)に作られた田畠結解状(デンパタケチゲジョウ)はこの近辺の馬込、子安、南東村の田の面積・耕作者の年貢を記したもののだが、その中に「渡免」(ワタシメン)として八十歩が年貢対象地からはずされている。これは船で年貢を運送することで、その代償として年貢分から控除されたものである。貝淵の「渡海面」も本来は渡免でそれが渡海面と変化したものであろう。この点から貝淵には船を扱う人が大勢いて、鎌倉道を通って対岸の三浦半島(六浦又)まで運んでいったものと思われる。

一方この尾根道を通る街道は、現在の志學館高校正面を過ぎ、しばらくして二股となる。爰に江戸時代の文政五年(一一二二)の道標がある。左の道が桜井へ下る道である。君津中央病院の脇を通過して「峰の薬師」

下に通じている。この古道は風情の残る竹林を抜けて北西に延び、尾根筋を下って静香家(雑貨店)の脇に出る。ここは文政七年(一一二四)の道標があったが、ここも住宅団地造成のため、現在は団地内に移転されている。真舟から貝淵迄の道は、すでに跡形も無く、貝淵の泉屋米店の向かいの道路に面した処に、わずか五十米ほどの脇道が残っている。これが今残る鎌倉街道の続きである。この地が渡海面と言われる所で、目の前は矢那川を挟んで木更津町であり、河口が船着き場であったであらう。

## 今年度下期の活動

一、十一月十二日(日) 蘇我コミュニティセンターで千葉氏入門の公開講座を行った。

二、十一月二十五日・二十六日「きぼーる」一階広場で市民活動支援センター主催の各団体の活動展示会があり本会も参加してパネルやパンフレットに拠る本会の紹介展示を行った二日間で本会の展示品に足を止めた市民は約二十名であった。評判が良かったので、大変効果があったと思っております。今後とも会員の参加を期待したいと思います。

## 編集後記

平成二十九年度もあとわずかで終わります。本会も色々な事業を順調に進め大きな成果が得られました。来年度に備えますます各事業の充実を図り会員皆様の期待に添うような事業を進めていきたいと思っております。



## 会員募集について

会の発展はなんといっても会員の増加です。千葉氏に関心のある多くの皆様と力を合わせて事業を進め新しい事業にチャレンジしていくことだと思っております。会員の皆様も仲間の方々にご協力をお願いします。

- 一、年会費 三千元
- 二、事業 講演会、現地見学会等
- 三、連絡先 事務局長 日向安昭
- 四、090-8305-6601